

戦争という「災害」

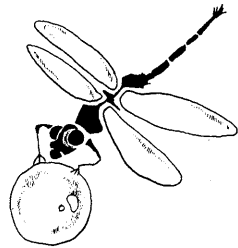
小川 剛

戦争が終わった時、私は小学校五年生。その年の三月十日、東京大空襲がありました。

戦況がきびしくなり、私は家族と離れて、一人、宮城県の叔母の家に縁故疎開をしていましたが、空襲の数日前、何か家庭の事情でたまたま、東京の両親の所へもどってきていたのです。そして、実家のある品川で、東京の大空襲を眼^まのあたりにしました。空は真っ赤で、焼夷弾が落ちる時に、パッパと花火のように落ちる。「あ、おとした、おとした」などと言いなからそれを見ていたのです。

爆撃は江東区が中心と聞き、深川の森下という所に叔父が住んでいたものですから、翌々日の十日、両親と一緒に叔父の安否を確かめに出かけて行きました。

東京駅から歩いて行く途中、あたりは文字通り“死体累々”。戦争のむごさときびしい現実を眼のあたりにさせられました。少し行くと、通りの所に何とグランドピアノが一台おいてあり、自由にお持ち下さい”と墨で書いてあるのです。私は小さい時から音楽がとても好きで、そこにグランドピアノが…、ご自由に…と。思わず立



ち止まって、ポロポロッと音を鳴らしてみましたね。死体累々の状況の中におかれているピアノを目の前にして、音楽好きだった私のピアノに対するあこがれのようなものもあつたのですね。そして母に「このピアノ、ほしい！」と言つたのですが、あの状況ではどうしようもありません、心を残しながら通りすぎたのです。

そこには、戦争という爆撃で人の命が奪われていく悲惨な状況を眼のあたりにするということと全く異質な経験が、となり合わせにあつたのです。

帰りにまた同じ道を通ってきた時は、もうありませんでした。誰かがご自由にお持ちになつたのでしょうか。私みたいな人がいたのですね。弾いてみた時、ちゃんとした音がでたので、焼けただけだ、というのではない。その辺は焼け野原で、道の端っこにポツンとグランドピアノがおいてある——何というか、神の啓示の様でした。叔父の家

族を捜している間、五時間ぐらい経っていただろうか。その間に私と同じように、ピアノを鳴らしてみても、そして、運んだ人がいたのですね。

私は、あのピアノを運び出した人や持つて行った人がいたということに、心のゆとりのような人間的なものを感じました。人間であることの証は、単なる機能主義に終わらず、もっと幅の広いものを持つている、意外性を生かしていけるということです。

何であそこにグランドピアノがおいてあつたのか、そして、それに魅かれる人がいたのか……

災害というものを見る時、良い意味で、複眼的に見る必要があると思う。被害という一面的な見方でなく、そこに含まれている意外性、本質的な部分も重ねて見ることも大切なことではないか。災害に備えるということは大事なことだけれど、災害がおきてしまった時、非日常的な何かが見えてくるチャンスもあるということです。極めて本

質的な部分と非日常的な部分が重なって出てくる災害というものの中から、意外性をつかみとっていくということも必要なのではないかと思えます。ただ全てを灰色に塗りつぶし、希望を奪うということだけで災害を見ると、その後の復興のきっかけがなかなかつかめない。

今回の神戸の場合もそうですね、人の温かみとか……。人間であることが機械とちがっているいろいろな点で創造的な形での問題解決を可能にしていく部分もあるわけです。今までどちらかというところとしがちな問題を掘りおこしてくれる。そういう時に現れてくる人間の持つ意外性をくみとってくれるような、そんな非日常的なものが出てくるというのも災害の一つの特色でしょう。

我々の時代というのは、小学校二年生の時に第二次世界大戦が始まり、そんな息苦しい雰囲気の中でも、東京の中流階級の子ども達にはまだ、よく言われているような追いつめられた雰囲気はな

く、普通の子どもの生活を送っていたように記憶しています。それだけに死体累々を見た時に、隠されていた戦争の姿を見せつけられた思いがしました。たまたま、東京にもどってきたその一週間が、私にとって非常に密度の濃い体験を与えてくれ、軍国少年だった私も一〇〇%変わりましたね。事実を見ないと、本当の姿は分からないような気がするのです。そして、死んだ人の殆んどは、何も悪いことをしていない普通の市民だということもあとで分かったのです。戦争体験を観念ではなく事実としてつきつけられ、そのことが私の原体験となり、その後、強い反戦の信念のようなものを持つようになったのです。そして、それが今の私の生き方の基盤にもなっているのです。

よ。(談)

(お茶の水女子大学)